

外部評価を受けて



## 外部評価を受けて

奈良先端科学技術大学院大学は、学部を置かない国立の大学院大学として、最先端の研究を推進するとともに、その成果に基づく高度な教育により人材を育成し、もって科学技術の進歩と社会の発展に寄与することを目的として設立され、

1. 先端科学分野に係わる高度な研究の推進
2. 国際社会で指導的な役割を果たす研究者の養成
3. 社会・経済を支える高度な専門性を持った人材の養成
4. 社会の発展や文化の創造に向けた学外との密接な連携・協力の推進

の4点を理念としています。

こうした理念に基づく本学の大学運営と教育・研究・社会貢献活動等の状況について検証するために、第2期中期目標期間の前半3年間、平成22年度～24年度における中期目標・計画の進捗状況及び効果について、全学及び各研究科で自己点検を行い、その結果について学外有識者による外部評価をお願いしました。4名の委員の方々から構成された全学外部評価会議では、「業務運営・財務内容等の状況」「教育に関する目標」「研究に関する目標」「国際化に関する目標」の4つの視点からの評価をいただき、学部を持たない大学院大学であるという特徴を生かした組織的な取組について、基本的に高い評価をいただくとともに、いくつかの課題を指摘していただきました。また、各大学の個性・強みを生かした国際競争力の戦略的な強化とそれを支える大学運営ガバナンスの改革等、現在、国立大学の機能強化が強く求められていることを踏まえて、本学の機能強化について積極的な提言もいただきました。

「業務運営・財務内容等の状況」については、教職協働による大学運営、機動的な教育研究体制の編成、学内資源の戦略的な配分、外部資金の獲得実績等について、高い評価をいただきました。同時に、我が国の人口減少とそれに伴う政府の資源配分の重点化等への対応方針について大学全体で認識を共有し、大学として一定の規模を維持し、それに相応する資源配分を確保するための方策を検討することが必要であるという御指摘をいただきました。

「教育に関する目標」については、開学以来、各研究科で整備・拡充してきた、体系的な教育課程と教育方法の工夫を、高く評価していただきました。同時に、研究科横断カリキュラムは現在のところ概論が中心であり、深い専門性に立ちながらも総合的にものを見、考える能力、問題解決に向けて複数分野の知識を統合できる能力を涵養するため、分野を異にする学生の協働や討議を行う機会を専門教育においても提供する必要性が指摘されました。さらに、学生の課程修了後の進路の多様化に対応して、人材育成目標と修得予定知

識・形成予定能力の設定、それに相応する教育課程の編成を複線化することが今後の課題ではないかとの提言をいただきました。

全学外部評価会議と平行して進められた、各研究科の教育と研究についての外部評価においても、各研究科の教育プログラムに対する高い評価と同時に、同様の課題が指摘されました。すなわち、3研究科からなる大学院大学の特徴を活かし、3研究科が研究のみならず教育における連携も推進し、より幅広い学際領域でも活躍できる人材の育成を期待することが、共通に指摘されました。また、博士後期課程の学生の充足率、学位授与率、学位授与までの期間について、その改善が必要であることも指摘され、企業が後期課程の学生に何を期待しているのか、また博士号にいかなる価値を見出しているのか等について、企業サイドの考え方や要求を検討し、この結果を後期課程のカリキュラムに反映させてはどうかという提言もいただきました。さらに、企業で第一線に立つ人材の育成という点で、最近、「自らの研究が社会にどう貢献するのか」という価値を語れない学生が増えており、企業における研究者・技術者に求められていることを知る機会を充実させること、また、奈良先端大の特徴を出すには、社会・企業が求めている人材の検討も踏まえて、総花的ではなく、奈良先端大で養成すべき人材像を明確にして、そのための教育プログラムを整備すべきとの提案もいただきました。

「研究に関する目標」については、本学の教員が全体として活発に研究活動を進めており、その成果も世界レベルであること、また、学際融合領域にも積極的に進出していること等を評価していただきました。その上で、イノベーション志向の研究や課題解決に向けた研究についてはより一層の充実が望まれるという御指摘、さらに、研究領域によっては、ある程度の研究者の集積が不可欠であり、大学のフラッグシップとなるような研究領域を定めて、研究者を集めるような施策を検討することも考えられるという御提言をいただきました。各研究科の外部評価においては、女性教員・外国人教員の増加のための努力、研究面においても全学的な連携、さらには、国内外の研究機関とのネットワーク形成の必要性が、共通して指摘されました。さらに、大学院大学のフットワークの軽さをもっと有効に生かし、挑戦的な大きなテーマあるいはロードマップを設定し、その実現を先導できるとともに対外的にも「顔」となるリーダー的人材を一人でも多く育成することが必要という、研究体制の戦略的な構築へ向けた提言をいただきました。

また、近年、研究者が研究資金獲得の過度の競争のため、実験データの改ざんとその改ざんデータを使った論文公表など、研究者としてはもとより社会人としても有るまじき問題が起こっています。このような不祥事はもとより研究者の倫理観の欠如によるものであることは言うまでもありません。そこで、大学院生の講義の中に、研究倫理に関することを特別講義として取り上げるとともに、若手研究者を含めた教員全員のFD研修会においてもこの問題を考える必要があるのではないかという、時機を得た指摘がありました。本学でも、科学技術研究者コミュニティの一員としての研究倫理、国民から付託を受け、

公的資金により研究を進めているものとしての社会への説明責任、自らの研究が社会的な影響力を持つことに対する社会的責任等、様々なレベルでの研究者としての倫理観の教育と教員の自己点検の取組を一層強化していきたいと考えます。

「国際化に関する目標」については、学生の海外派遣や留学生の積極的な受入れ等、教育のグローバル化、国際コースの設置や海外FD研修、海外SD研修等、教育研究体制とその支援体制のグローバル化に向けた取組を評価していただきましたが、学生が海外に行くことが特別な事業における派遣や会議出席のためでなく、教育課程にビルトインされたものになること、博士前期課程における留学生比率の更なる向上、教育研究から管理運営まで含めた国際通用性の確保、国際的に通用する教育の質保証を基本とする大学院教育の実現等、国際化に関しては、多くの課題があることが指摘されました。

我々は、外部評価委員の方々の高い評価を受けた、本学の大学運営と教育・研究・社会貢献活動等の現状に安住することなく、本学の一層の発展に取り組む所存です。そのために、全学及び各研究科の外部評価における委員の方々の御指摘、御提言は、今後の教育研究活動と大学運営を考えて行く上で、非常に重要なポイントであると受けとめています。本学の機能強化の基本的戦略は、3研究科の連携・融合を進めることにより、科学技術の発展と社会からの要請に答えていくことにあり、教育においては、教育環境のグローバル化を一層徹底し、その中で、教員組織に依存した教育プログラムから、人材養成目標を実現するための教育プログラムへ変換していくことを目標にしています。また、研究面においては、研究大学強化促進事業において、教員等の個人レベルと奈良先端大という組織としての国際的ネットワーク構築を一層強化し、本学の研究力の国際的ビジビリティを高めていくことを戦略的課題として、世界を舞台とした教員の頭脳循環の促進、本学サテライト研究室の海外設置と海外有力研究グループのサテライト研究室の本学への招へい等の取組を始めています。こうした、本学の一層の国際競争力の強化に向けた機能強化のための大学改革を具体化する上で、今回の評価結果を学内で共有し、それを最大限生かしていきたいと考えます。

最後に、全学外部評価会議委員の方々、3研究科の外部評価会議委員の方々には、御多忙にもかかわらず、本学の自己点検・評価書を御精読いただき、貴重な御意見をいただいたことに、心からお礼申し上げます。また、今後とも本学の発展に向け、御指導、御支援いただければ幸いです。

平成 26 年 6 月

奈良先端科学技術大学院大学長  
小笠原 直毅